

研修報告

# シンガポール研修報告

## A report of study tour in Singapore

中 島 義 和

### 1. 目 的

- ・ユネスコスクールの中核となるESD「持続可能な開発のための教育」の理念を基礎とした教育を実践している海外の学校の実践を視察することにより、本校での様々な教育活動（お茶の水タイムや自主研究等）の参考とする。
- ・附属中学校における国際理解教育を促進するきっかけとするとともに、国際交流相手校の可能性を探るきっかけとする。

### 2. 訪 問 先

シンガポール

- ・早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校 (Waseda Shibuya Senior High School in Singapore)

担当：理事・事務局長（早稲田大学国際部調査役） 平野 泰 様

57 West Coast Road SINGAPORE 127366 TEL: (65) 6773-2950 / FAX: (65) 6773-2951

- ・Kranji Secondary School (科蘭芝中学)

担当：Principal (校長) Tan Hwee Pin (Ms) 先生

61 Choa Chu Kang Street 51, SINGAPORE 689333 TEL (65) 6766-2464 / FAX: (65) 6766-2095

- ・Nanyang Technological University (南洋理工大学) / NIE (National Institute of Education)

Associate Professor (Humanities & Social Studies Education) /Sub-Dean, Practicum Office of Teacher Education Tan Geak Chin Ivy (Ms) 先生

### 3. 研修期間

平成26年3月25日（火）～平成26年3月30日（日）

### 4. 研修内容

- ・シンガポールの教育制度や学校体制、ESDの状況等についての情報を得る。
- ・訪問校における授業や取り組みを見学する。
- ・訪問校の先生方との情報交換および意見交流を行う。
- ・シンガポールの国立大学の先生に専門的立場からの教育体制やESD教育についての情報をうかがう。
- ・授業や諸活動への参考とするため、シンガポールで使用されている教科書や教材などを入手する。
- ・多民族国家・文化を体感し、国際理解教育のヒントを得る。



		ベイ」地区見学 夕食～就寝	<ホテル泊>
3/30 (日)	4:00	起床	
	4:30	ホテル出発 (タクシー)	
	5:00	チャンギ国際空港到着、搭乗手続き	
	5:50	NH802 便 シンガポール (チャンギ国際空港) 発	
	14:00	東京 (成田国際空港) 着	

## 6. 研修参加者

附属中学校教諭 寺本 誠 (社会科・教務部)・中島 義和 (英語科・研究帰国部・研究推進委員会)

## 7. 研修報告

### (1) 早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校

(Waseda Shibuya Senior High School in Singapore)

#### ①学校について

1991年に渋谷幕張シンガポール校として開校し、2002年から早稲田大学の系属校となった。運営母体が株式会社であり、早稲田が6割の経営権を握っている。渋谷教育学園とのジョイントベンチャーの形である。生徒の半分は、親がシンガポールで仕事を



している関係で在籍しており、残りの半分は寮生であり、その親が近隣諸国およびドバイやソウルなどで仕事をしている。1980年代、日本企業が盛んに海外に進出するようになり、日本人学校は中学部まではあったものの、高校相当の学問ができる機関が必要となった。当初、日本の大学の付属校を誘致していたもののうまくいかず、現在の形に落ち着いた。

本校の受験実質倍率は約2倍で、昨年度まで実施していた留学としての入学システムは、現地希望者を優先する意味で募集を停止した。教育活動は日本のカリキュラムに則って進められており、1学年110名3クラス3学年を定員としている。生徒の編入は抜けた分だけ補充する形をとっており、入学試験で定員までとるようにしている。生徒は、保護者の帰任のタイミングで帰る場合もあるが、2年生になると子供だけを残して帰る場合が結構あるという。したがって、生徒だけが残って寮生活となるので、寮の在籍は3年時になるにつれて増えることもよくあるという。経営は、国からの補助金はないので、すべて自己調達である。生徒は諸経費として寮生になると3年間で100万はかかるという。ちなみに、シンガポールでは、外国人は希望している公立学校に入るのはなかなか難しいという。定員に空きがある学校に割り振られてしまうという。

教員は専任教諭が29名(うち1名は外国育ちの日本人をオーラルコミュニケーションコーディネーターとして採用)、ネイティブ非常勤講師(国籍は問わずESLの教え方を習っている人を採用)が9名、その他芸術系科目の非常勤を併せて50名以上が勤務している。専任教員は任期付きであり、本人の希望と学校の状況で更新するシステムとなっている。30代の教員が中心で、経験として3年程度の勤務を終えて、帰国するケースが多いようである。他の系属校との人事交流もないようだ。教員の入れ替えが激しい中、若い教員を中心に積極的な教育が進められている印象である。

## ②授業や部活動について

英語および数学は習熟度授業であり、3クラスを4クラス展開で行っている。また、国語の一部のクラスでも習熟度授業を行っている。英語では、「英会話チュートリアルイングリッシュ」という授業を開講しており、1クラス30人程度を10の能力別のグループ（すなわち1グループが3～4名）に分け、同時展開でネイティブスピーカーとの授業を行っている。

生徒たちは、大学受験も視野に入れなければならない。英語の授業は英語で行おうと試みているが、他の主要科目は難しい。書道の担当者が中華系のシンガポール人であり、選択授業では中国語がある。100%付属校であれば、マレー語なども開講できるかもしれないが、現状では難しい。イマージョン教育もできていない。

放課後は部活動ができる。小・中学生はスクールバスなどの関係もあり、下校時間が決まっているので、部活動にじっくりと取り組める環境にはないが、高校生は公共交通機関を使い登下校しているので、18:30の最終下校時刻までは部活動をやってよい。

## ③進学について

学校として130人分の指定校枠がある。早稲田大学をはじめ、協定校推薦枠として関西学院大学に15人、関関同立あたりに80人程度の枠がある。来年度より、早稲田大学の推薦枠は58人に増えるといい、これは定員の半分以上を越えることになるらしい。

生徒は日本人学校出身者がほとんどであり、帰国後、日本の大学への進学を想定している生徒がほとんどという。

## ④シンガポールの教育事情

現在のシンガポールは、日本が受験地獄と言った時代によく似ているらしい。親は朝早く子どもを車で送り、実績のある小学校に送るといふ。学歴社会であり、親の多くは子どもをNUS（National University of Singapore：シンガポール国立大学）に進学させたいため、小学校からのそのためのレールを敷く。塾よりも家庭教師を頼む方が多いという。しかし、ここ数年は、芸術やスポーツにも目を向け始め、その点では様変わりしてきた感じもあるという。

シンガポールでは、中学校にあたる secondary school が4年間あった後、高校にあたる junior college が2年間ある。この junior college は、10校程度あり、レベルには差があるようだ。前述したが、シンガポールでは外国人は希望する公立学校には入りにくいいため、本校のような在外教育施設に通わせるか、インターに行かせるパターンが多いようだ。

## ⑤ESDの視点での取り組み

国際理解教育の視点から、月に2回程度、中華、マレー、インドの現地校体験入学を実施している。これは、第3言語習得のきっかけともなっているようである。教育省による語学センターでの交流から、そこに通う現地の生徒の所属する学校に訪問したり、逆に現地の学校の生徒が本校を訪問したりと相互交流がなされている。また、シンガポール国立大学の学生との交流も行われている。

学校行事である文化祭は一般公開されており、現地の方がかなり訪れるという。約2600人の来校者のうち6～7割が現地の人たちである。生徒たちは、日本語と英語の両方でアナウンスや案内などの対応をしたりして、生きた交流を楽しんでおり、国際交流の実践の絶好の場ととらえている。国の公用語が英語であり、普段の生活で実際に使える環境があり、自然に身につけることが可能な環境にあるのはやはり大きいという。

修学旅行は、2月にオーストラリアのパスでファームステイをするということで、日常の学習を活かす機会ともなっている。

また、環境教育の視点から、現地校の人たちと「クリーンアップ作戦」と称して、清掃活動を行ったり、ホーカーセンターという屋台の集合している食事場所における「自分で片付けようキャンペーン」を実践したりと、国際交流とあわせて様々な活動を実施している。

さらに、生徒たちが日本人でありながら、シンガポールにいることへの理解を深められる活動も行っている。日本人墓地（墓地公園）やシンガポールで亡くなった方の墓地などの清掃活動を行ったり、多民族国家・文化理解を目的とし、中華・インド・マレーそれぞれのカレンダーを理解させるために街に装飾見学に出かけたりなど、多民族への理解を生で感じられるような活動を設定している。このような活動が積極的に行える土台には、シンガポールという国の安全かつ安心できる国家風土がある。生徒を色々なところに連れて行きやすかったり、行き来しやすかったりするので、生徒たちが伸び伸びと様々な活動に取り組みやすいのである。

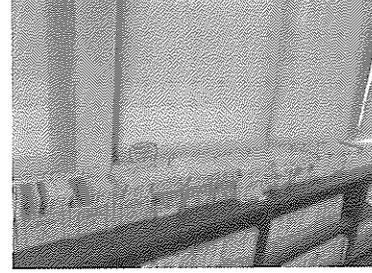


学校としては、日本に帰国した際、あるいはさらに他の国に行ったときに、シンガポールがどんな国か説明できるようになってほしいという願いのもと、様々な教育活動が展開されているようであった。

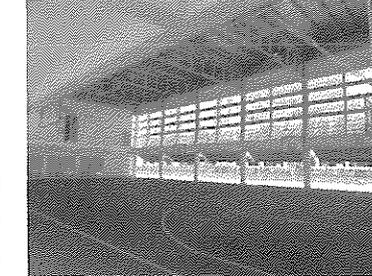
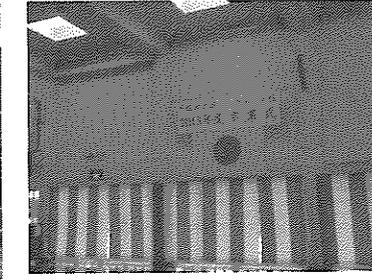
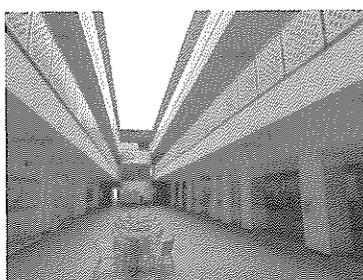
学校としては、日本に帰国した際、あるいはさらに他の国に行ったときに、シンガポールがどんな国か説明できるようになってほしいという願いのもと、様々な教育活動が展開されているようであった。

#### ⑥施設について

学校内および学生寮を案内していただいた。自然豊かな環境、充実した施設の中で、生徒たちが伸び伸びと学習や他の活動に取り組んでいる様子を感じられる訪問となった。



写真（左）手前は読書学習スペース、奥はコンピュータ室（中央）図書室（右）英語多読コーナー：洋書レベル別



写真上段 左から 校舎内、大隈重信像、ホール（普段は食堂として利用するが、式などもここで行う）

写真下段 左から 中庭、芝生グラウンド、アリーナ

## (2) Kranji Secondary School

### ①学校について

学校を訪れると、Tan Hwee Pin 校長先生と、2人の副校長先生が出迎えてくれた。自己紹介、名刺交換、そして写真撮影の後、訪問日の一日の予定確認を行った。

本校は1995年に開校した。約1350人の生徒と114人の教員から成っている。4つの学年が在籍しており、日本の中1から高1にあたる。それぞれの学年は、Express、Normal Academic、Normal Technical

の3つのレベルに分けられている。K、R、Aの学校名のはじめの3つがコース名となっていた。

以下に、School Vision、School Mission、Core Values、School Mottoを紹介する。



**School Vision** : Confident learners with the passion to excel / Active citizens with a heart to serve  
**School Mission** : Serving with heart, values and purpose to bring out the best in every child  
**Core Values** : Respect / Responsibility / Resilience / Compassion / Integrity / Passion For Learning  
**School Motto** : Breakthrough

各教室には、以下のポスターが掲示されていた。

**attitude** : Goal setting is important. Goal DOING is more important.  
**success** : Never put off till tomorrow what you can do today!

### ②参観した授業について

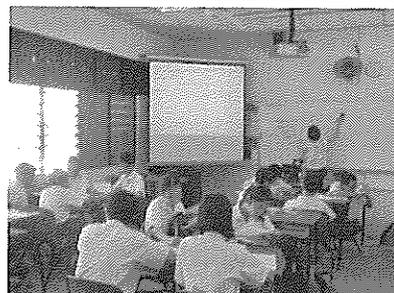
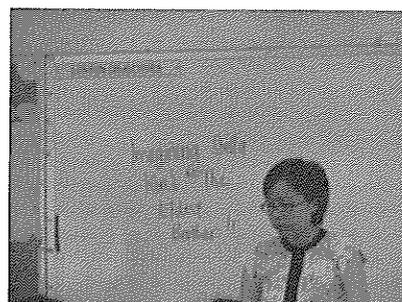
■ 9:00-9:50 1年(中1) 英文学(授業者: Miss Lee Wenting)

ホワイトボードには lesson objectives (授業のねらい) として、Imagining Stella Kon's "The Eldest Brother" が示されている。中1 40名(男子10名、女子30名)のクラスの授業であった。スクリーンとホワイトボードを併用して授業が進む。マレーシア航空の事故のニュースを授業導入に設定し、悲しむ遺族の写真を見て、生徒たちに感情を尋ねる。生徒たちは次々に感情を英単語で答えている。教師の問いに生徒は自分なりの考えをワークシートに記入していた。

Stella Kon の THE ELDEST BROTHER という作品を教材としている。演劇の台本になっており、劇をするらしい。配役を決めるのに盛り上がっている。先生と配役を得た生徒たちは打ち合わせしている。他の生徒たちは、その劇を見ながらワークシートに記入する。劇を見た後、それぞれの登場人物についてグループでディスカッションを行う。ワークシートでは、point、evidence、elaboration (要点と根拠と詳述) を記入することが求められている。最後にワークシートの内容を共有してまとめを行った。

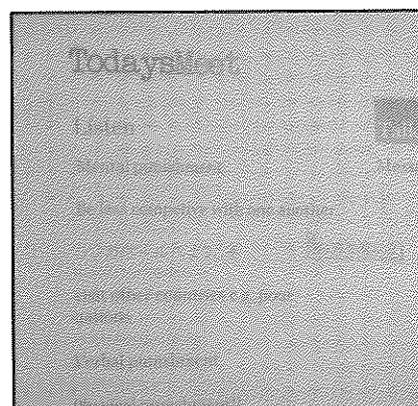
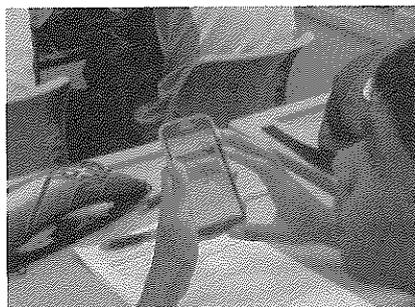
■ 9:50-10:50 4年(高1) 英語(授業者: Ms Amy Yap)

テーマは、Expository Essay (解説文) であった。教員の導入発問 Will Singapore not become a gracious society even in 50 years? に賛成か反対か意見表明をするところから授業が始まる。生徒たちは和やかな雰囲気の中、教員の質問に生徒がざっくばらんに答えており、interaction の充実した



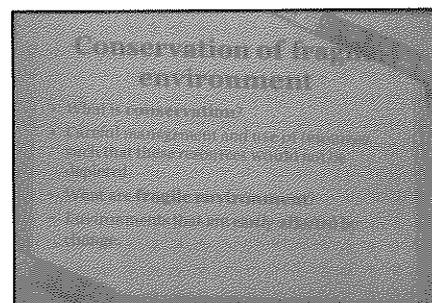
授業であるという印象を受けた。授業では、シンガポールで1970年代に行われた courtesy campaign 1970s と、現在行われている Singapore Kindness Movement という2つのキャンペーンの You Tube の映像を見せ、それに関して教員がエピソードを語っている。

その後、日本での2011年3月の東日本大震災後の仙台からのイギリスのニュース映像とシンガポール国内で起きた出来事に関するニュース映像を You Tube で見せ、両者を比較させていた。生徒たちは考えながら、ワークシートの質問に各自が答えていた。そして、生徒たちは自分のスマートフォンを取り出し、「Today's meet」のページにログオンし、自分の名前と意見を入力し送る。すると、スクリーン上に示されたページの意見が次々に更新されるのである。他者の意見を見て盛り上がり、また新たな意見が投稿される。教員は、その意見を紹介しながら授業を進めていくのである。最後に生徒による授業の summarizing (要約) が行われ、教員がそれに答える形で授業をまとめた。



#### ■ 11:30-12:30 4年(高1) 地理(授業者: Miss Nor Zamzarina)

授業は、wildasia の You Tube 映像を見るところから始まった。観光業についての事実を理解し、持続的な観光マネジメントや環境問題について扱う内容であった。アメリカ合衆国の地理を確認する際、地図をスクリーンで見せながら、その地図を拡大したり、動かしたりしながら説明を加えていた。ラスベガスのあるホテルのショーの映像を見せた後、使用する水の量に関して、カナダの家庭、途上国の1年、豪華なホテルの客室を、グラフなどを提示しながら比較して見せた。



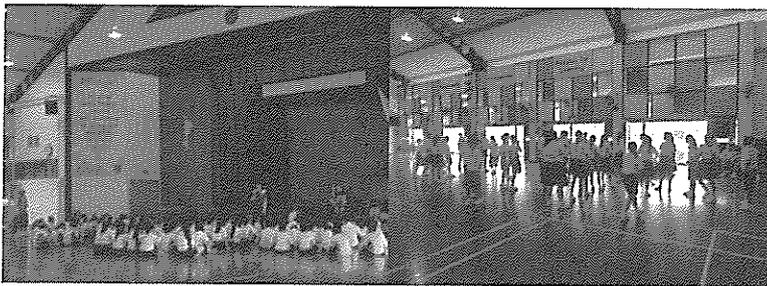
他にも、世界遺産のカンボジアのアンコールワットの映像を、適宜解説を加えながら紹介し、そこから問題点や課題点などを探ったり、同様に、インドネシアのバリの例を紹介したりした。そして、持続可能な観光業や脆弱な環境の例について考えるとともに、それを守るためにはどうすべきか、なぜそれが必要なのかということについて問題意識を持たせて考えさせるものであった。

#### ③校内見学

校舎を案内していただいた際に、体育館ではダンスの授業が行われていた。外部の専門家の方が担当している。音楽の授業の一環で、ダンスをとりいれているようだ。

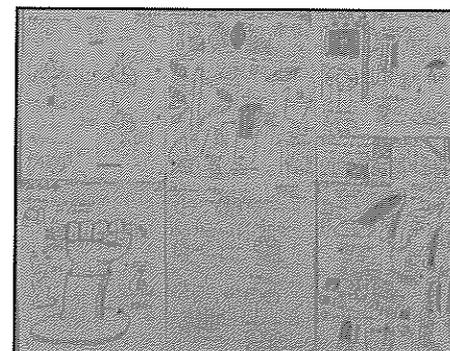


右下の写真はデザインの部屋。本校の授業では、ものづくりのデザインやプロセスを大切にとらえ、様々な素材を用いて作品制作が行われているようだ。このデザインの部屋には、design situation zone や development zone など、目的やプロセスに応じてエリアが分けられている。机上のデスクマットの中や掲示板には様々な作品のデザイン図が掲示されている。写真は、そのデザイン図を撮影したものである。



④教員との情報交換

ランチを兼ねて行われた情報交流では、本校の説明を詳しくしていただくとともに、我々の学校にも興味を持ってくださり、色々と質問をしていただきました。相互に質問をし合い、答え合う中で、より深い情報交流ができたと感じた。



本校では、週に2日、朝礼後の15分間で新聞記事の紹介・質疑応答・リフレクションを実施しているようだ。この活動を通して、general knowledge を身につけることをねらっている。生徒たちは毎日タイトなスケジュールで生活を送っているため、この時間にじっくりと世の中で起きていることや問題となっていることなどに向き合い、考え、他者と共有する中で、知を深めていってほしいとのことだ。また、教員がミーティングをしている間にはエクササイズ（練習問題）を朝学習として行っている。

以下に示すように、授業のスタイルや教材、手法など実に様々な形を追究し、実践している。また、授業内外を通して、様々なアクティビティを設定しているのも本校の特徴と言えよう。

- **Varied teaching methodologies**  
group / pair work, class discussions, games, quizzes, debates, drama, inquiry-based learning, project work, coursework, ICT-based lessons, experiential learning
- **Programmes catered to students with different abilities**  
IP coaching, peer-tutoring, bridging courses, competitions
- **Integrate 21CC into the Curriculum**  
21CC skills, Thinking Routines

その一つである「英語プログラム」では、プログラムと評価を以下のように構成し、実践している。

Programme	Assessment
<b>Reading Programme</b> ・ School wide approach to reading the newspaper ・ Use of Thinking Routines to facilitate discussion	Written reflections
<b>Self-Directed Learning</b> ・ Weekly exercises to target grammar, summary & writing skills	Worksheets designed by EL teachers

<b>Performance Assessment</b> ・ Drama skills training for communication skills and expression of personal responses to issues in Literature texts.	・ Improvisation skills test ・ Script-writing & performance
---	---

英語力を高めるプログラムの概要が以下の通りである。

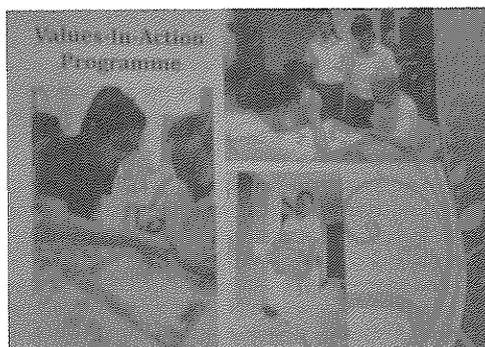
<b>○English Week</b> ・ Oratorical Competition ・ English games <b>○National Literature Festival</b> ・ Literature trailer performance ・ Set text debate ・ Unseen text debate <b>○Projects and Workshops for high ability learners</b> ・ Collaboration with National Library Board for internship ・ Flash Fiction Writing workshop
--

リーダーシップ育成プログラムとしては、日本の学校にもあるような生徒会役員組織や体育大会実行委員組織、そして、CCA (Co-Curricular Activities) と呼ばれるシンガポールの全ての生徒が必須参加となっている学業外の課外活動のリーダーを対象としたプログラムが組まれている。以下の表は、本校における CCA を示している。4つのカテゴリーから構成されている。興味深かったのは、下表左から2列目の Uniformed Groups である。このグループは、制服(写真参照)を身につけて活動するグループで、brigade や cadet corps といった学校における軍隊組織である。



Sports & Games	Uniformed Groups	Clubs & Societies	Performing Arts
Badminton	St John Ambulance Brigade	Environment & Community Service(ECoS)	Symphonic Band
Basketball	National Cadet Corps	K-Productions(Technical)	Choir
Football	National Police Cadet Corps	Media Innovation	Modern Dance
Table Tennis	Boys' Brigade		K-Productions(Drama)
	Girls' Brigade		

他にも、自分たちで植物育成などを行いながら、環境問題について考える環境プログラムや老人ホームや社会福祉施設での活動を通して福祉について学ぶ「Values-In-Action」というプログラムもあった。



国際理解教育にも力を入れており、以下の方針のもと、積極的に海外の学校との交流を行っている。

#### 国際理解教育の方針

1. Develop in students the 21CC of global awareness and cross-cultural skills that would enable them to develop cultural sensitivities.
2. Deepen students' commitment and rootedness to Singapore.
3. Expose students to Asia and the world and sensitize them to Singapore's place in the world.
4. Every kranjian to go for at least one overseas trip with the school throughout his 4-5 years in his years at Kranji.



また、特色あるプログラムとして、以下が挙げられる。『So What? Magazine』という雑誌の記事を活用し、私たちを取り巻く様々な種類の問題に目を向けさせ、考えさせるという授業プログラムや海外研修旅行プログラム、人文科学を様々な角度から学習する週間を設け、集中的に学習を深めるプログラムがある。

#### Upper Secondary 対象：『So What? Magazine』

- ・ To use magazine as a tool to extend learning beyond the classroom
- ・ To plan learning activities using articles from the magazines.

#### Lower & Upper Secondary 対象：Overseas Learning Journeys

- ・ Ho Chi Minh(2010,2011),Hanoi(2012), Korea(2013)
- ・ To extend learning beyond the classroom
- ・ To infuse other components such as Service learning, Character and Citizenship Education, SEL competencies, 21CC competencies.

#### Lower & Upper Secondary 対象：Humanities Week

Secondary1,2 : Lower Secondary Humanities Quiz

Secondary3 : Seminar

Secondary3 : Amazing Race

Secondary4 : Initiate and Implement Amazing Race

Humanities (人文科学) 学習のプログラムは次の目的を持っている。

#### Humanities Programme の目的

- ・ To develop critical thinking and a thirst for knowledge beyond the classroom through excellence in teaching.
- ・ To encourage exposure to global issues and develop feelings of empathy towards global developments.

また、その要素は以下の通りである。

#### ○Inquiry Based Learning

Geographical Investigation on coasts / Source Based Analysis

#### ○Learning Journeys

Parliament Visit, Little India, URA

#### ○Varied Modes of Assessment

Drama and perspective taking

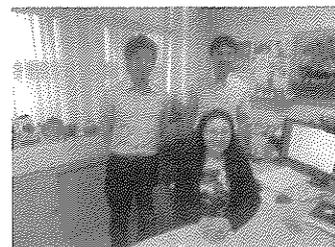


Nanyang Technological University 入口

#### (3) Nanyang Technological University / NIE (National Institute of Education)

本大学は、シンガポール国立大学と1991年に設置されたシンガポールにある国立大学の一つであり、シンガポール国立大学とともに双璧をなす大学である。シンガポールの西に位置し、200ヘク

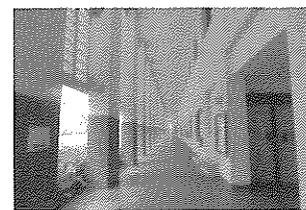
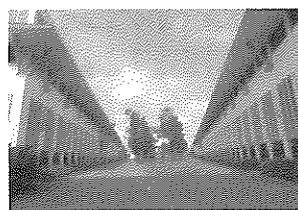
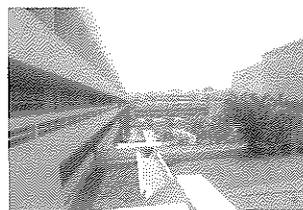
タールの広大な敷地（シンガポール最大かつ工科系大学として世界最大級）の中で、23,500人以上の学部生と10,000人の院生が教育を受けている。大学はengineering、science、humanities、art & social science、medicalの4つのcollegeから成り、それぞれのcollegeの下に日本での学部に対応するschoolが属している。



今回は、本大学のHumanities & Social Studies Educationの准教授であり、同大学内の機関であるNIEのPracticum Office of Teacher Education（教師教育実習オフィス）の副部長であるTan Geak Chin Ivy先生の研究室を訪問する機会をいただいた。

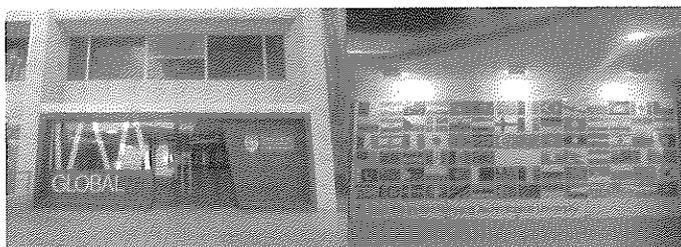
Tan先生からは、シンガポールの中学校・高校のナショナルカリキュラムをご紹介いただいたり、シンガポールの国家の問題に即したESDの実践などに関する情報をいただいたりすることができた。

構内は非常に広く、地図を片手に迷うほどであったが、自然豊かなキャンパスであった。また、学生が快適な学生生活を送ることができるように考慮された諸施設であった。



右の写真はグローバルラウンジである。様々な国からの留学生や現地の学生が集い交流を深める場として活用されているようである。

下の写真は学生のためのラウンジである。目的に応じた様々なzoneに分かれている。中には写真最右のようにビリヤードやゲームをするzoneもある。



## 8. 成果と課題

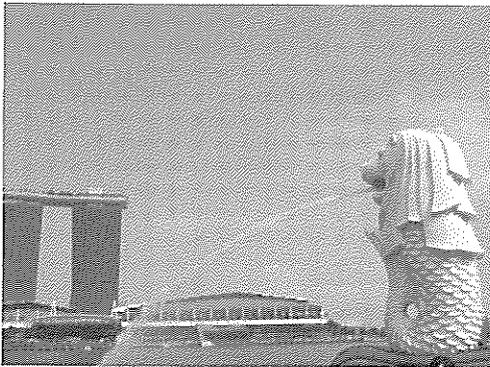
今回の訪問では、ESD < Education for Sustainable Development : 「持続可能な開発のための教育」 > の理念を基礎とした教育を実践しているKranji secondary schoolの視察や主に地理・環境教育の観点からESDを考えていらっしゃるNanyang Technological UniversityのTan先生にお話を伺う機会、海外における高等教育施設の視点から早稲田大学の平野様のお話を伺う機会を得ることができた。

ESDとは、環境、貧困、人権、平和、開発といった、現代社会の様々な課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そして、それにより持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動のことである。今回の訪問国であるシンガポールは、そのすばらしい環境からもわかるように、環境教育に力

を入れている。また、中華系、マレー系、インド系を中心とする様々な文化が融合しつつ、それぞれを認め合う人権への意識が高い国でもあると感じた。さらに、公用語としての英語とともに、自分の母国語も大切にしつつ、海外に目を向け積極的に国際化を図ろうとする国際理解の観点においても先進的であるという印象を受けた。

多民族文化研修ということで、チャイナタウン、リトルインディア、アラブ人街、そしてシンガポール国立博物館の見学を行ったが、このシンガポールという国がこれまでの発展を遂げつつ、その土台には前述した環境、人権、国際理解を中心とするESDの要素がいたるところにちりばめられていると感じた。

私たちが学校での授業や活動にESDの要素を採り入れていく場合には、これらの「日常的に存在する」という身近さこそが重要なのではないかと考えた。生徒たちが自分の問題として心から認識し、自らが思い、考え、動いていける課題を見出し、解決する方策を生み出していくことが重要である。私たち教員は、そのような課題設定のリードやサポートをしていく必要がある。そのためにも、教科の授業や総合的な学習の時間に、「生きた」形での話題提供、問題提起を行い、生徒たちが自分の身に引きつけて取り組めるようにしていくことが求められている。その際、下のESDの概念図にあるように、関連する様々な分野を「持続可能な社会の構築」の観点からつなげて、総合的に取り組んでいけるようにしていくこともまた重要である。



出典：「ユネスコスクールと持続発展教育」（日本ユネスコ国内委員会）